

INTERVIEW

自治医科大学附属さいたま医療センター センター長
百村伸一先生



医療の谷間に灯をともす 医師になってください。

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

研究より臨床を

山田隆司(聞き手) 今日は自治医科大学さいたま医療センターにセンター長の百村伸一先生をお訪ねしました。ここ埼玉県地域医療、さいたま医療センターの取り組み、あるいは今後の総合診療医への期待などを伺えればと思います。

まずは先生のご経歴をお聞かせいただけますか。

百村伸一 私は奈良県出身ですが、奈良県の御所というところで父親が開業していて、山間のほうまで往診に行ったりする姿を見て育ちました。父親は地域医療そのものという感じでしたね。でも自分は東京大学に入り、初期研修で回った東大の第二内科が循環器内科で、数字ではっきり表せる血行動態に興味を持ちました。動物実

験なども手伝いましたので、例えば強心薬を使ったら実際の血行動態はどうなるのかというようなことも見ることができ、循環器が面白いと思うようになりました。

しばらく医局におりまして、1982年からハーバード大学のBeth Israel Hospitalに3年間留学しました。そこには血行動態で有名なWilliam Grossmanという心臓専門医がいらっしゃって血行動態研究のための動物実験に従事するかたわら、カテーテルの手技もさせてもらいました。私のボスがカテーテルの達人であったということもあり、3年の留学期間のうち7ヵ月ぐらいは毎日カテーテルをやらせてもらいました。またちょうどそのころにエイズという病気がある

らしいということがアメリカで注目され始めてきた時代でしたし、冠動脈インターベンション(PCI)や大動脈狭窄症に対するバルーン治療も始まったころでした。私のいた病院では定期的に心臓移植の手術もありましたので、そういう症例を見る機会もありました。

帰国して、公立学校共済組合関東中央病院に1年いた後、東大第二内科の医局に戻り、臨床ではカテーテルをやりながら、血行動態の研究をやっていました。1998年に虎の門病院循環器センターの内科部長の話があり、大学でずっと研究するのは自分には向いていないのではないかと考えていた時期でしたので、虎の門病院へ行くことにしまして、2006年まで8年間いました。大学にいた長い期間よりも虎の門にいた8年間というのは、エキスパートの先生たちが多く勉強になり、再び臨床への興味が湧いてきま

した。

その後自治医大の、当時の大宮医療センターの教授のお話がありました。いろいろと調べてみたところ、循環器の臨床アクティビティがとても高いということが分かりました。例えば急性心筋梗塞を何例診ているかというのは重要な指標になりますが、虎の門病院のような都心の病院というのは、まわりに病院がたくさんありますから年間50例くらいなのですね。ところがここは150例で、これはすごいなと思いました。そういうところの医局を運営するのは面白そうだと感じて、2006年に着任してもう10年になります。

その後、大宮、浦和、与野、岩規の4市が合併してさいたま市になり、名称がさいたま医療センターに変わり、私は5年前にセンター長に就任しました。

地域の基幹病院としてますます発展

山田 今、さいたま医療センターは新しい建物の工事が進んでいるようですね。

百村 外来棟が平成元年にできたもので30年近く経ち、かなり古くなったのと手狭になったので建て替えることになりました。現在病診連携を推進していますので1日の外来患者数が1,300名くらいですが、それでも開設当初からするとずいぶん増えています。また最近がんの化学療法に力を入れているので、その設備も拡充して外来のオンコロジーセンターを併設してコンビニエンスを図ります。

外来棟の目玉は、ホスピタルアートで外来棟の1階に大きな壁画を配置することになっています。病院はやはり殺風景ですから、壁の絵で

心温まる感じになればよいと思っています。

山田 外来棟の完成はいつ頃ですか？

百村 竣工式は10月29日で、11月3日～6日で引越す予定です。

山田 訪れるたびにどんどん発展する感じですね。

百村 開設時は85床だったと思いますが、だんだん増えて今は608床になっています。さらに県の第6次医療整備計画でICU 10床と、三次救急が開始されるので救急病床10床、NICU 3床が増え、631床に増床になります。周産期は現在は地域周産期母子医療センターですが、さらに施設を整備し、できれば総合周産期を目指しています。

山田 救急にも力を入れていらっしゃいますね。